

試験 I

問題 1

(1) 正解：1 ランク：A

【摩擦音】

- 1) [r] 有声歯茎弾き音（ラ行の子音）
- 2) [s] 無声歯茎摩擦音（サスセソの子音）
- 3) [ʒ] 有声硬口蓋歯茎摩擦音（collageなど）
- 4) [h] 無声声門摩擦音（ハヘホの子音）
- 5) [ð] 有声歯摩擦音（thisなど）

1) は弾き音。他は摩擦音。

(2) 正解：2 ランク：A

【促音の調音法】

促音は、後続音の調音点と調音法に影響を受け、後続子音と同じ口の構えで1拍分待つ。音声記号は後続子音と同じ記号を重ねて書く。

- 1) [kikkw] 破裂音
- 2) [gohho] 摩擦音
- 3) [toppw] 破裂音
- 4) [hotto] 破裂音
- 5) [rappa] 破裂音

2) は摩擦音であり、調音点の隙間に呼気を通した状態で1拍分待つため、その間は息の音が聞こえる。他は破裂音であり、調音点に閉鎖を作った状態で1拍分待つため、その間は無音になる。

(3) 正解：5 ランク：A

【複合名詞のアクセント】

複合名詞のアクセントは、基本的には語単独のアクセントから変化し、複合語特有のアクセントになる。

- 1) チーズ (HLL) + かまぼこ (LHHH)
→チーズかまぼこ (LHHHLLL)

2) クラブ (HLL) +活動 (LHHH)

→クラブ活動 (LHHHLLL)

3) 幼児 (HLL) +教育 (LHHH)

→幼児教育 (LHHHLLL)

4) 宇宙 (HLL)+ 開発 (LHHH)

→宇宙開発 (LHHHLLL)

5) 整理 (HLL) + 整頓 (LHHH)

→整理整頓 (HLLLHHH)

5) は語単独のアクセントから変化していない。

(4) 正解：4 ランク：A

【連声の有無】

「連声」とは、語と語が合成される際の変音現象の一つで、前部要素末尾 [m][n][t] と後部要素語頭の母音・ヤ行・ワ行が接続したとき、その音がマ行・ナ行・タ行に変わる現象のこと。例えば、観（かん）と音（おう）が接続して観音（かんのん）になるなど。

1) 隠（おん） + 密（みつ） → 隠密（おんみつ）

2) 経（けい） + 年（ねん） → 経年（けいねん）

3) 出（しゅつ） + 納（のう） → 出納（しゅつのう）

※ 「すいとう」と読むこともある

4) 反（はん） + 応（おう） → 反応（はんのう）

5) 珍（ちん） + 味（み） → 珍味（ちんみ）

4) は、前部要素（反）の末尾[n]と後部要素（応）の語頭母音が接続し、ナ行に変化している。

(5) 正解：3 ランク：A

【音読み・訓読み】

1) 二…ニ（音読み） ふた／ふう（訓読み）

2) 三…サン（音読み） み／みっ／みい（訓読み）

3) 四…シ（音読み） よ／よん（訓読み）

4) 五…ゴ（音読み） いつ（訓読み）

5) 九…ク／キュウ（音読み） ここの（訓読み）

数字を「いち・に・さん・し・ご・ろく・しち・はち・きゅう・じゅう」と読んだ場合はすべて音読みであるが、「いち・に・さん・よん・ご・ろく・なな・はち・きゅう・じゅう」と読んだ場合、「よん」と「なな」のみ訓読みになっている。

(6) 正解：5 ランク：A

【漢字の字源】

「漢字の字源」とは「六書」を指している。六書とは、漢字を成り立ちや用法に基づいて6種類に分類したもの。

① 象形	物の形を線で表したもの 例：山、川、木、目、人
② 指事	象形では表せない状況・概念などを点や線で表したもの 例：上、下、中、本、末
③ 会意	意味を持つ要素を組み合わせて作ったもの 例：林、森、町、明、休
④ 形声	意味を持つ要素と音を表す要素を組み合わせて作ったもの 例：花、校、聞、紙、週
⑤ 転注	既にある漢字を派生させて使ったもの 例：樂（楽器→音を聞くとよい気分になる→楽しい、快樂） 長（老人→経験を積んだ見識のある人→長官、 ^{年長} 長）
⑥ 仮借	意味とは関係なく、同音あるいは類音性を利用したものの 例：無（本来は「豪華な衣装で舞う人」の意） 今（本来は「（壺などの）ふた、栓」の意）

5) 「上」は横線を基準に、その上の位置に点を置くことで「うえ」という概念を表した指事文字。他は象形文字。

(7) 正解：1 ランク：A

【短い形の使役受身形の有無】

使役受身形は、1グループ動詞のみ「せら」を「さ」にすることで縮約形を作ることができる（例：書かせられる→書かされる）。ただし、1グループ動詞であっても、1) 「話す」のように辞書形が「す」で終わる動詞は縮約形にできない。

- 1) × 話さされる
- 2) 笑わされる
- 3) 泣かされる
- 4) 働かされる
- 5) 待たされる

(8) 正解：3 ランク：A

【動詞の意志性】

動詞の分類の一つに「意志動詞／無意志動詞」がある。意志動詞は人間の意志による動作を表し、無意志動詞は人間の意志によるコントロールのきかない動作を表す。無意志動詞には、「～（よ）う」や「～つもりだ」などの形にすることができないという特徴がある。

- 1) ○ あっちの席に移ろう。
- 2) ○ 早くここを去ろう。
- 3) × 草が茂ろう。
- 4) ○ 我々はここに残ろう。
- 5) ○ ゆっくり回ろう。

3) 「茂る」は無意志動詞。他は無意志動詞として機能することもあるが、意志動詞の用法もあるため、上のように「～（よ）う」の例文を作ることができる。

(9) 正解：5 ランク：A

【接続詞の用法】

5) 「むしろ」は接続詞ではなく「それよりも」という意味を表す副詞である。他は逆接の意味を表す接続詞。

(10) 正解：3 ランク：A

【「を」の用法】

「を」には「対象」「経路」「起点」などの用法がある。3) は「通す」行為の「対象」が車であることを表している。他は「経路」の用法。

(11) 正解：1 ランク：A

【「まで」の用法】

「まで」には、格助詞としての用法と取り立て助詞としての用法がある。格助詞として使われると「到達点」を表し、取り立て助詞として使われると「極端な例示」を表す。1) は、弟が作る料理の極端な例が「チーズ」であることを表しており、この「まで」は取り立て助詞である。他は格助詞で「到達点」を表している。

(12) 正解：3 ランク：A

【「ておく」の用法】

「ておく」の用法は主に、ある目的のために前もって行為を行う「準備」と、そのままの状態にする「放置」である。3) は、試験のために前もって「教科書を見直す」という行為を行うことを表しており、「準備」の用法。他は「放置」。

(13) 正解：5 ランク：A

【「ながら」の用法】

「ながら」の用法は主に、ある動作に伴う付隨的な動作を表す「付帯状況」と「逆接」である。5) は「友人の家の前まで行ったが帰ってきた」ことを表しており、「逆接」の用法。他は「付帯状況」。

(14) 正解：3 ランク：B

【副詞的成分と述語の関係】

副詞をその用法によって分類すると「程度」「数量」「様態」「時」「評価」など様々に分けられる。この「様態」をさらに細かく見ると、ある動作をどのように行うかという「様子」を表すもの、ある動作の「結果」として現れる状態を表すものなどが含まれる。3) は副詞成分が動作の「様子」を、他は動作の「結果」を表している。

- 1) 碎け散った「結果」、粉々になった。
- 2) 煮込んだ「結果」、軟らかくなった。
- 3) 手早い「様子」で炒めた。
- 4) 焼きあがった「結果」、ふっくらした。
- 5) 塗った「結果」、淡い桜色になった。

(15) 正解：4 ランク：C

【「については」の用法】

「～については」は複数の語が結び付いて格助詞と同じ働きをする複合格助詞の一つ。「～について」に、取り立て助詞の「は」が接続した形。「～について」は話題の中心となる事柄を取り上げる場合に使われ、一般的には「話す、述べる、説明する、議論する」などの言語活動を表す動詞や「考える、調べる、分析する」などの思考を表す動詞の対象を示す（例：新商品について私が説明する／日本の食文化について調べる）。しかしここに「は」が接続することで、「は」の用法の一つである「対比」のニュアンスが強まる場合が多い。1) 2) 3) 5) は他の事柄と対比してある事柄を取り上げているため、「は」を接続させない「～について」の形では不自然になる。4) は対比のニュアンスがなく、「～について」の場合と同様単純にある事柄を取り上げ、「調べを進める（調べる）」対象を示しているだけである。

- 1) ? この案件について、恐らく問題ありません。
- 2) ? 講演会の会場について、まだ設営が終わっていません。
- 3) ? この度の納品について、ご迷惑をお掛けいたしました。
- 4) ○ その容疑者の身辺について、現在調べを進めています。
- 5) ? こちらの商品について、皆様にご好評いただいております。